

趣味園芸の礎『ガーデンライフ』を創刊 誠文堂での植村猶行さん

宮田 増美

私は8月6日からネパールのランタンリルンへ、高山植物撮影を目的としたトレッキングに行っていた。

20日に帰国して、初めて植村猶行さんが亡くなられたと知らされたのだが……、16日の告別式のあった日の正午頃、ランタンコーラ（谷）に沿って下山中、つい出来心で足元に咲いていたペゴニアを採集して持ち帰っていたのだ。

さらに、虫の知らせとはよく言われることだが、その日の朝、前夜に見ていた夢のことをメモ（常にメモ用紙を携帯しろということも植村さんの教えであり、今日の山旅でも記録係であった）していた。

「昨夜は熟睡できず、3回ほどトイレに行ったが、その度に夢を見ていた。夢ではカメラマンの神田淳さん（注：『写真集/日本のラン』の著者）の運転でどこかの花の展示会に行ったのだが、会場には江尻（注：光一）さんや植村さんが居て、久しぶりに大御所の対面で両者が懐かしがっているような場面が現れていた……」とある。

江尻さんと植村さんはかなり以前に園芸文化協会で対立していて実際にはありえないことだし、12日に植村さんが亡くなられたことなどまったく知らなかったのに……と、自分ながら驚いてしまった。

8月24日、大泉学園の植村さんのご自宅へ伺い、採ってきたペゴニアの葉を押し葉にして仏前に捧げ、この夢のことを奥様に話したら涙を流されておられた。

編集部からの依頼で、植村さんが勤めていた株誠文堂新光社時代の植村さんについて以下にまとめてみた。

植村さんが誠文堂に入社したのは戦後まもなくの昭和24年、はじめは出版部に所属し、『園芸大辞典』の編集に携わっていた。この『園芸大辞典』をまとめていたのが石井勇義氏で、戦前、誠文堂から発刊されていた『実際園芸』という雑誌（大正15年10月創刊、昭和16年12月

刊）の主幹であり、植村さんに大きな影響を与えた方だった。なお、『園芸大辞典』は第1巻が戦時中の昭和19年12月に、最終の第6巻は昭和31年3月に刊行されているが、石井勇義氏は昭和28年7月に亡くなっている。

戦争中休刊していた『実際園芸』は、昭和21年6月に『農耕と園芸』と改名して再登場、出版部に居た植村さんもやがてこの雑誌に移り、花卉生産園芸の企画・取材とともに趣味園芸の分野も担当していた。

世の中が落ち着き始め、趣味園芸が盛んになりかけた昭和37年春、季刊の趣味園芸雑誌『ガーデンライフ』が創刊された。植村さんはその立ち上げから、同誌が月刊化された昭和45年までの9年間、編集長として活躍された。

その後『農耕と園芸』編集長、第2編集部（農園芸書）の部長を経て編集部次長となり、昭和56年、55歳で定年退職されている。

誠文堂は昭和62年、創立75周年の記念事業の一環として『実際園芸』の復刻ダイジェスト版を企画、それを石井勇義氏ともっとも近かった植村さんに依頼することになった。

同書の編集後記に植村さんは署名入りで6ページにわたって“現代園芸の礎・人と植物”というタイトルで、明治・大正・昭和の花卉園芸界で活躍した人々についてを、『実際園芸』誌に掲載された記事を通して、解説している。

石井勇義氏は日本の花卉園芸界に多くの貢献をされてこられた方だが、植村さんは彼を師として仰ぎ、常に前向きな姿勢で業界を見つめ、より新しいものを、より新しい技術を世界的な視野で捉え、それをできるだけ多くの写真や図を使って分かりやすく表していくという、戦後の趣味園芸ジャーナリストをリードしていった方だったといえよう。

合 掌